

第1回美浜かつぱカーニバル(昭和31年7月29日かつぱ命名式)

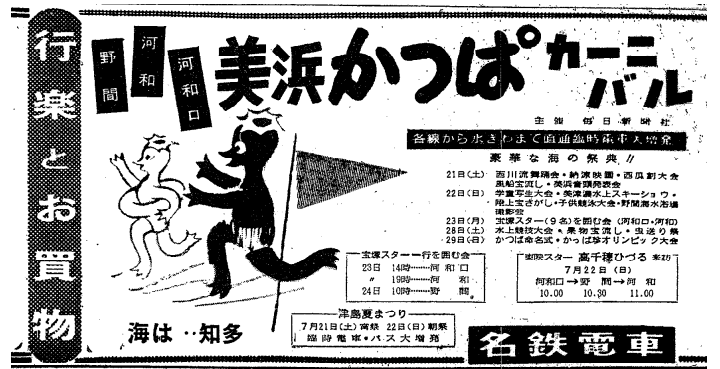
毎日新聞 昭和31年6月29日(1956年金曜日)朝刊の記事抜粋

海をいろどる催し 知多の浴客50万人を越す?

美浜一帯 野間、河和、河和口の各海水浴場で7月8日ごろ浜開き。今年は3ヶ所で毎日新聞社、名鉄電車で『美浜カツパ・カーニバル』を展開する。高さ1メートル80余りのコンクリート製カツパ・シャワーが3海水浴場に設けられ、期間中宝さがし、カツパ・コンクールなどが催される。さらに7月中旬には、昨年同様米空軍、海上保安庁、地元消防団が出動、ヘリコプターで水難者救助訓練をする予定。休憩施設には「毎日海の家」と「毎日名古屋婦人文化センター海の家」が各海岸に1ヶ所ずつ設けられる。美浜町では新しく美浜音頭をつくり観光客を楽しませる。



昭和31年6月29日 毎日新聞朝刊 記事



昭和31年7月20日 毎日新聞夕刊 広告

美浜のかつぱ伝説

編集

かとうまこと

表面のつづき

かつぱの親子は大慌て、死に物狂いで和ちゃんを探しましたが、どこにもその姿を見つけないことはできません。途方に暮れた親子は呆然と立ちつくし、海を遠く見ているしかありませんでした。

数日後、助けられた子どもは元気になり、村人たちを安心させました。そしてその子どもは、かつぱが助けてくれたこと、雨を降らせ村を救ったのはかつぱの親子だったことを村中に語り伝えました。

すると、和ちゃんかつぱを探そうと、浜に行く村人がひとりふたり、そしていつしか浜にたくさんの方が集まるようになったのです。やがてその浜は、「かつぱ浜」と呼ばれるようになり、村人たちがかつぱ親子に感謝の気持ちを込めて集まる、集いの場、憩いの場となり大きな「和」ができていきました。

そのなほは今にも語り継がれ、野間海岸の「野間太郎父ちゃん像」、河和口駅前で鯛を抱く「花ちゃん娘像」、河和かつぱ浜の「ゆり子母ちゃん像」そして「かつぱの家族像」として残され、人々から愛されつづけています。

ところで花ちゃんは、なぜ鯛を抱いているのでしょうか。

波にのみこまれた和ちゃんかつぱは、となり村の沖のかなた「竜宮城」というところにたどり着き、そこで手厚く看病され元気を取り戻したとこのこと。花ちゃんが抱いているのは、竜宮城からそのことを知らせに来てくれた鯛なのだそうです。おかげで、また家族そろってしあわせにくらすことができるようになったといえます。

このはなしを耳にした村人たちはたいそう喜び、その後も「かつぱ浜」に集い、和を広げ、末ながく美しい浜を守りつづけたということです。めでたし、めでたし。

かつぱの家族とやろう会(細目)が協働で作成しています。モリコロ基金の助成を受けています。

かつぱの家族・やろう会発行